



英語の勉強法

私は今 85 歳である。今年もこの 4 月 8 日（火）、上高瀬小学校の入学式に参列させてもらった。そして、自分の小学校、中学校、高校、大学の入学式を懐かしく思い出したのだった。

太平洋戦争敗戦の翌年、昭和 21（1946）年 4 月、上高瀬小学校ではなく、戦前の名残・上高瀬国民学校に入学した。男子組、女子組だった。男子は 60 人近くいたと思う。2 人用の長机と長椅子、右隣は大井英臣君だった。1 年間席替えなし。生涯離れられぬ友情で結ばれた始まりだった。2 年生から上高瀬小学校と名称が変わり、男女混合の組になった。私達の学年の小学校 6 年間（1 年の時は国民学校）、日本は丸丸アメリカの進駐軍の統治下にあった。そんな中で、4 年生でローマ字を習った。そして、中国の簡体字ほどではないにしても、画数の多い漢字は簡略化された。例えば、折角覚えた「學」は「学」に、「國」は「国」に変わった。生徒も大変だったけど、先生はもっと大変だったのではないかな。

昭和 27（1952）年 4 月、開校したばかりの三ヶ村組合立東中学校に入学した。未だ体育館は無く、運動場で入学式だった。三ヶ村とは、上高瀬村、勝間村、比地二村である。学校は現在の未来創造館の場所にあり、3 年後高瀬町誕生により高瀬中部中学校と名称変更した。

1 クラス 50 人の、5 クラスあった。これからは英語の時代が来る、英語だけは勉強しなければと張り切っていたように思う。私は 1 年 4 組だった。学級担任は社会科担当の矢野由夫先生だった。嬉しいことに、小学校 1 年から大の仲良しの大井英臣君と同じクラスだった。英語は安藤陽一先生、大井君は、英語のテストはいつも満点だった。

2 年生になる時に組替えがあった。2 年 2 組だった。またまた嬉しいことに大井君と同じ組になった。担任も矢野先生だった。11 月に、高瀬市（下高瀬本門寺大坊市）へ行こうと大井君の家へ寄った。どうした訳か、こんな会話をした。

「大井君は勉強がよう出来てええのう」

「小野君は、家でどの位の時間勉強しよんや」

「テストの時はするけど、普段はあんまりしよらん」

「それはいかんわ。ほんなら高瀬市へ行くん止めて、今から一緒に勉強するか」

「おお、そらそれでも構わんぞ」



それから英語の勉強を始めた。大井君は、

「教科書の今日習った所を開いて見ていてくれ」

と言うなり、教科書を開かないで読んでいった。完璧に暗誦していたのだ。私はびっくりした。

「英語は覚えるしかない。覚えるのは教科書しかない。予習は新しい単語を辞書で調べてノートに書く。後は文の意味を考えながら、ゆっくりと10回位読む。それだけや。復習は、暗誦出来ているか確認するだけや。小野君も僕と同じようにして英語の勉強してみいや。100点取れると思うよ」

大井君は私に、噛んで含めるように、英語の勉強の仕方を教えてくれた。大井君が言われた事を、私は誓いを立てて実行した。それからというもの、私も英語は95点を下ることはなかったように思う。

冬休みになった。午前中は、大井君は野球部、私は陸上部の練習がある。大井君が、「昼ご飯をウチで食べて夕方まで一緒に勉強しよう」と言ってくれる。勿論私は即座にOKした。私は母に、冬休みは昼から夕方まで大井君の家で勉強することに話して、日曜日は一日中手伝いをするからと、父に頼んでおいてくれとお願いした。

大井君の家で勉強が終わって帰る時には、大井君は私に「帰ったらこれだけ勉強しておくように」と宿題を出してくれた。

3学期の初めに、英・数・国の実力テストがある。結果は30番まで廊下に張り出される。大井君は大体1番だった。私は100番以内に入ったことは無かったと思う。数日後に、突然担任の矢野先生に呼ばれた。

「何だろう？」と先生の前に立った。

「健一君、びっくりじゃ。今度の実力テスト4番ぞ。どなんしたんぞ」

「それ、ほんまな。冬休み中、毎日大井君と一緒に勉強したんや」

2年生の3学期から、大井君は生徒会長である。後任の学級委員長の選挙をしなければならぬ。1年生から2年生のそれまで、学級委員長は当然のこと、文化委員、体育委員、図書委員、経理委員の何れにも一度もなったことがない。それがどうしたことか、ほぼ満票で私に決ってしまったのだ。私は「ようせん」と拒否したが、矢野先生に2日ばかりで説得されて仕方なく引き受ける羽目になった。

昭和30(1955)年4月、高瀬高校へ入学した。1クラス56人の4クラスだった。大井君は1組、私は2組だった。私と大井君と一緒に陸上部に入って、1日も休まず練習

に励んだ。1年生の終業式の前日である。陸上の練習が終わって、大井君と私は顧問の秋山昌弘先生に呼ばれた。

「今日で陸上部を退部せよ。お前ら2人は走っている場合ではない。しっかり勉強して大学へ行け。それが、お前ら2人が社会へ貢献するために進むべき道じゃ」と、数時間に亘って諄々と諭された。2人は泣く泣く退部した。

2年生になって組替えがあった。私は1組、担任は英語の牧忠雄先生、大井君は3組、担任は陸上部の秋山昌弘先生だった。夏休み前、大井君が私に、夏休み中の英語の勉強法について聞きに、牧先生の所へ一緒に行こう、と私を誘う。大井君は英語の学力は学年でトップ、私は遠く及ばないが、金魚の糞になって付いて行った。

「夏休み中に英語の実力をもっともっと付けたいんだけど、どうしたらよいでしょうか」大井君は単刀直入に質問した、先生は即答された。

「夏休み中にか。時間はあるわのう。それは簡単なことじゃ。原書を読め。大井は「アニマル・ファーム」、小野は「ハイジ」を読め。帰りに政本の本屋へ寄って注文しとけ。一週間もすれば届くじゃろ」

「ハイジ」か。小学校5年の時に読んで痛く感動したあの本か。ようし、高校生じゃ。今度は英語で読むぞ。気合がかかってきた。

夏休みの初日に本は届いた。黄緑色の硬い表紙の分厚い本だった。朝起きてから夜寝るまで、毎日ぶっ通しで10日以上かかったかなあ。その間、他の勉強は一切しないで、辞書を片手に読み通した。

2学期の最初の実力テスト、実力が付いている実感があった。それまでよりうんと点が上がっていた。以降、英語の勉強は、授業の予習と復習、それに課外を受けるだけ。参考書は1冊も買わずだった。それでもまあまあ自分でも納得出来る実力が付いたのは、ハイジを根気良く読み通したお陰だと思っている。

発達心理学では、機械的記憶力は15~16歳で頂点に達し、論理的記憶力は25歳で頂点に達すると教えている。また、15~16歳は正に自我の目覚めの時である。自分が自分を鍛えることの出来る年齢である。その自我を鍛えた能力こそが、生涯に亘りその人の能力となり、知恵となり、性格となってその人物を形成するのではないか。

70年も前の中学生、高校生の時の英語の勉強を振り返り、つくづくとそんな思いに至るのである。

(令和7年5月1日)